帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

中世の木製品・漆製品

斉木秀雄

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．木製品・漆製品の研究現状
Ⅲ．問題点の整理
Ⅳ．今後の課題

Ⅰ．はじめに

発掘調査で出土する遺物の中で漆製品・木製品の占める割合は、一般的な台地上の遺跡では極めて少なく、沖積低地に営まれた遺跡では高い。また少量しか木製品が出土しない台地上の遺跡ではさらに出土遺構が限定される傾向がある。これは木製品が通常の乾燥した土質内では腐食してしまうが、保水性の高い井戸、溝等の遺構内では腐食し難いという特性のためであり、腐食せずに廃棄されたほとんどが出土する陶磁器他の遺物との決定的な違いでもある。

遺跡の立地により、遺存状況が決められてしまう木製品・漆製品は特に椀・皿を含む食器形態や曲物等の貯蔵形態を中心に、結果として「限定的な出土遺物」という誤った認識を与えることになった。そのためそれらの木製品の出土する遺跡、出土しない遺跡という、遺跡のある意味では立地からくる結果論での評価が、あたかも木製品・漆製品を持っていた遺跡、持っていなかった遺跡という性格的な評価になることもある。これとは逆に「本来はすべての遺跡にあった」ことを前提に、少量しか出土しない碗・皿等の器種を腐食して出土しない木製品・漆製品に求める動きも、やはり食器形態を中心にある[1]。これらの認識は、結果として出土遺物のなかの木製品の位置をますます曖昧にした。またすべての遺跡で出土することのない性質の遺物であるため、研究は当然のように出土する地域・遺跡に限られたものとなり、中世考古学の初期研究段階での全国的な遺物編年作業においても漆製品の椀・皿が土器類と同等に表示されることは極めてまれであった。

木製品に含まれている漆製品は、容器に限ってみれば芯は革や籐などを用いる一部を除き木材であり、木製品とは同一形状で漆塗りの有無でのみ異なるものが多い。したがって

木製品という範疇に含むことはやむをえない。しかし、鎌倉での出土品には木胎の椀・皿他以外に、漆塗りのかわらけ、手焙り、各種骨製品などがあり一括して木製品の範疇に含めることはできない。かわらけや手焙りに漆を塗ることは鎌倉でも特殊な例であるが、骨製品は刀装具をはじめ漆塗りの製品が多い。漆製品が漆を塗った器物を総称しその範疇に「陶胎漆器」「籃胎漆器」という名称があるのならば、鎌倉出土の骨製品などの場合「漆塗り骨製品」「漆塗りの……」というべきかあるいは単に「骨胎漆器」「漆製品」というべきか判断に困る。

明確に区分することは困難であるが、漆製品は芯は何であれ漆を塗ってつくる（あるいは漆を塗る）製品を示すことになるので、木製品とは区別して独立させるべきであろう。したがって、本文中では木製品と漆製品とに区分している。しかし漆塗り骨製品などの名称定義に関しては個々に判断すべきでは無い一面もあるので判断を避け、奈良国立文化財研究所の『木器集成図録―近畿古代編―』[2]（以下『集成図録』という）での区分・提示を定義として用いた。当然のように井戸枠、井戸の側板、礎板、柱、壁板、杭等も木製品の範疇に個々に入るが、これらは遺物であると同時に遺構を構成する「構造材」でもあるので建築部材としてすべてを一括して扱っている。

II．木製品・漆製品の研究現状

戦後の日本国内の考古学の発掘調査で出土する木製品が最も注目を浴びたのは静岡県の登呂遺跡である。これ以降弥生時代遺跡を中心とする水田遺構等から多くの木製品が確認されている。しかしこれらはあくまでも中世以前のことであり、木製品も農具、呪術具を中心としている。中世以前の集落あるいは居住域での木製品の出土は西国では多いが、いわゆる東国地域ではあまり多くない。

中世遺跡（あるいはそれ以降）が考古学の発掘対象となり調査が行なわれた当初、井戸枠、杭等のいわば建築部材以外の木製品が多量に出土することはごく希であった。これは初期の中世遺跡の調査が主に台地上の居館、城、寺院で行なわれた結果である。木製品が中世遺跡の出土遺物のなかでしかるべき比率で出土し、考古遺物として明確な位置を占めるようになったのは関東地方では東京都の青戸・葛西城址の発掘調査[3]であり、関西地方では広島県の草戸千軒町遺跡の発掘調査[4]である。その後、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡[5]、神奈川県鎌倉市街地遺跡群[6]等の発掘調査でも多くの木製品が出土し、地点的に研究が行なわれている。各遺跡は一乗谷朝倉氏遺跡を除くといずれも低地に立地している。

全国的な中世木製品の研究は中世遺跡の発掘調査が盛んに行われるようになった1970年代に始まった。当初は出土する木製品が井戸枠など遺構の一部を構成する建築部材である

ことが多かったため木製品の研究と言えるほどのことは為されておらず、当然のように遺物の編年基準資料となるかわらけや国産陶器あるいは中国製の陶磁器他に較べ扱いが低いものであった。その後の調査で建築部材以外の形状の摑める製品も多く出土するようになったが、総合的な木製品研究がなされる環境はつくられなかった。出土した木製品の研究は地域かつ遺跡単位で比較的形状から用途が判断しやすい製品の同定に終始したため、例えば呪符や形代等の祭祀遺物あるいは履物といった個別項目的な研究が進展した。

この状況に一石を投じたのが前述した奈良国立文化財研究所の『集成図録』である。これは近畿地方の古代遺跡の出土遺物で構成されてはいるが、出土木製品を工具、農具、紡織具、運搬具、漁猟具、武器、服飾具、容器、篭編物、食事具、遊戯具、文房具、祭祀具、建築模型部材、雑具、部材、用途不明品の17項目に分類している。体系的に木製品を論じたのは『集成図録』が初めてである。その後奈良国立文化財研究所では『木器集成図録—近畿原始編—』[7]を刊行している。

中世遺跡出土の木製品を集成的に集めた研究はされていないが、木製品をとり上げた福井県立朝倉氏遺跡資料館の企画展「一乗谷の暮しと木」[8]等、陶磁器以外の遺物を展示することも行なわれ、木製品に対する意識も変わりつつある。今後おおかたの現地調査の終了した草戸千軒町遺跡や一乗谷朝倉氏遺跡他の整理結果が待たれる。さらに最近調査の増加している岩手県の平泉遺跡群での木製品研究の進展も中世初期の様相を知る上で注目されている。遺跡調査とは別に1989年に日本国内の中世遺跡出土の木製品の集成を目指して広島県の篠原芳秀氏を中心に福井県の南洋一郎氏、京都の植山茂氏、南博史氏、そして鎌倉の筆者らが集って「中世木器研究会」を結成し中世木製品集成図録を作成する活動を開始した。しかし、残念な事に様々な要因が重なって現在も完成に至っていない。

鎌倉での研究も市街地での発掘調査の増加した1970年代に始まっている。研究は他の中世遺跡と同様に建築部材を除く箸や曲物あるいは形状の摑める製品の用途の同定が主であった。比較的形状から同定しやすい箸でも折れて出土する事が多かった事、現在のものと形状が似ている事から屋根の留串という説もあって、当初は混乱したのである。その後しばらくはこの傾向が続いた。地下水の豊富な鎌倉市街地での発掘調査では極めて多量の木製品が出土するために、その中には完全な形をするものや形状が一般的でないものあるいは貴重なものが多く含まれていた。その結果、それらを優先的に取り上げ・報告する「優品主義」ともいえる傾向も存在した。

鎌倉で最初に体系的に漆製品・木製品を報告したのは鶴岡八幡宮境内遺跡の発掘調査報告書[9]であり、その後の報告書の指標となった。しかし、この遺跡でも木製品すべてを細かく取り上げて分類していたわけではなく、やはり完全な形のものや貴重で珍しいものを中心に取り上げる傾向があった。この発掘調査で主導的な立場にいた事もあり弁解じみた言

葉になるが、当時の鎌倉市街地の発掘調査はようやく制度的に確立したばかりであり、民間の調査団が行なうことは現在と変わりはないが、現在よりも少ない期間と経費しかなかったのである。このような状況のなかではこれが民間の一発掘調査団の最善の選択でもあったと考えている。

その後、多量に出土する木製品を数量的な報告が可能なまでに細かく取り上げ、報告したのは佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）の発掘調査[10]である。この遺跡の調査報告書では遺跡出土の「出土木製品図録」を作成している。基本は『集成図録』17分類であるが新たに設定した項目も含めて23項目に出土遺物を分類している。佐助ヶ谷遺跡での分類は以下の23項目である。

飲食具	椀、皿、鉢、膳、箸、板杓子、折敷、菜箸、壺杓子他
調理・炊事具	擂粉木、俎板、鍋蓋、柄杓他
容　器	曲物、くり物、篭、箱、蓋、把手、摘み、栓他
装身具	扇子の骨、団扇、刀子、櫛、温石箱他
履　物	下駄、板草履他
建　具	蔀、格子他
調度具	燭台、灯明台、膳脚（三足）、台脚、雲形他
火処具	自在鈎、灰ならし、火付け木、火箸他
漆工具	パレット、篦、刷毛、漆容器他
染・織具	手押木、杼、糸巻き、織機部材、紡輪、伸子針、張り手棒他
武　具	鞍、鏑、大刀の柄他
呪術具	呪符、杓子、斎串他
形　代	人形、船形、刀形、陽物形、鳥形、鋤形、鍬形、琵琶形、鏃形、家形、刀子形他
仏　具	印判、人形、軸飾他
遊戯具	独楽、羽子板、トンボ、木球、将棋の駒、獅子頭他
文房具	硯、筆管、硯箱の間仕切り他
計量具	物差し、升他
工　具	錐、槍鉋、槍鉋の柄、木槌、喬木、篦、刷毛、木垂他
農　具	鋤、鍬、えぶり他
墨書折敷	墨書折敷他
運搬具	荷札、天秤棒他
建築部材	
用途不明品	

佐助ケ谷遺跡の分類は『集成図録』に比べ大きく変化してはいない。中世になってより多様化する木製品の一部が大項目として補足されたにすぎず、しかもこれはあくまでも一遺跡での集成であり、鎌倉全体を含んだ場合さらに多くの項目が増える可能性がある。不十分ではあるが中世遺跡出土の木製品の集成を試みたことは評価されよう。

一方、木製品と同時期に始った漆製品の研究も地中条件によって残らない地点と残る地点との差が明確にあるため、全国レベルではあまり進んでいない。しかし、漆製品の特に椀・皿には赤色漆により鮮やかな文様が描かれていることが多く、これがために一般の製品よりも注目を集め、様々な研究が行なわれている。当初の研究は調査された個々の遺跡でわずかに行なわれている程度であったが、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所で1985年に開催された「中世遺跡出土の漆器」[11]と題する研究集会に際して全国的に中世遺跡出土の漆製品を集成した資料集が作成され、中世漆器の重要性が改めて認識された。これが汎日本的な漆製品研究のある意味での転換期となった。

考古学的な研究では土器碗・皿との対比の意味で、漆製品の椀・皿での形式編年研究が行なわれている。出土椀・皿編年は石川県の西川島遺跡の調査報告書収録のものが最も早い[12]。執筆した四柳嘉章氏は能登地域における漆製品を、出土資料を中心に伝世品をまじえⅠ期からⅥ期の６段階に区分し、単に器形変化等を見るにとどまらず、塗膜分析他の技術的な側面からの考察も加えている。四柳氏に漆製品に対する技術的研究の深い蓄積があったためでもあるが、筆者にはとうていまねることはできない。この編年は総合的な漆製品研究の方向性を示したことにおいても評価されるべきである。

各期の年代はⅠ期が12世紀後半、Ⅱ期が13世紀前半、Ⅲ期が14世紀、Ⅳ期が15世紀、Ⅴ期が16世紀、Ⅵ期が17～19世紀である。編年には漆器各器種が示してあるが、椀・皿の概要を見ると、Ⅰ期では口縁部が大きく開き、器高が低く、底部が厚い。内外面ともに黒色漆が塗られ、赤色漆の施文は確認されない。Ⅱ期では輪高台が出現し、口縁部の立ち上がりが強く、赤色漆の施文が内外面に施される。手描きの筆法は力強く簡素である。

Ⅲ期の14世紀前半代は最も小皿の出土量が多く、器形は口縁部が内湾するものと斜め上方に真直ぐ開くものとがある。Ⅳ期では後半になって高台の断面形が四角くなり、皿にもこの高台がつくようになる。この頃に最も漆製品が普及したと四柳氏はみている。Ⅴ期では椀の高台がさらに高くなり、赤色漆塗りの高台付皿も確認されている。Ⅵ期では前代までの器形変化からは直接推定できないほど器形が変化している。編年表で図示してある前期の器形は底厚が厚く、高台が高い。施文はほとんど見られず、赤色漆が塗られているものが多くなる。これらの編年結果と同地域の土師器の編年等から四柳氏は能登地域で土師器の深碗の類が消滅するⅡ期後半（13世紀後半）に、土師器に変わる食器としての漆製品椀・皿が普及したと考えている。四柳氏は後に編年を改め、Ⅰ期を11世紀、Ⅱ期１を12世

紀前半、２を12世紀後半、Ⅲ期１が13世紀前半、２が13世紀後半、Ⅳ期が２期に分かれ14世紀代、Ⅴ期がやはり２期に分かれ15世紀代、Ⅵ期も２期に分かれ16世紀代に設定している。[13]

その後、石川県同様に多くの漆製品が出土している草戸千軒町遺跡でも出土椀・皿類の編年試案が発表されている。[14] 整理途上であるため最終的な判断はされていないが、出土漆器を赤色漆による施文の有無にかかわらず内外面黒色漆をＡ類、内面赤色漆・外面黒色漆をＢ類、内外面赤色漆をＣ類に分類し、それらを出土層位・遺構によりⅠ～Ⅳの４時期に区分している。しかしⅢ・Ⅳ期は整理が終了していないことから分析は曖昧さを残している。各期の年代はⅠ期が13世紀後半、Ⅱ期が14世紀代、Ⅲ期が15世紀前半、Ⅳ期が15世紀後半から16世紀前半と想定されている。

概要を見ると遺跡の成立期のⅠ期はＡ類のみで施文は手描きよりも印判が多く、皿には明確な輪高台は付いてはいない。Ⅱ期になると後半にＢ類が出現し、Ａ類と混在するがＡ類のほうがまだ数は多い。Ａ類やＢ類の施文は筆書きの繊細な文様が多くなる一方で印判は前期に較べると激減している。Ⅲ・Ⅳ期は明確に資料区分していないが、Ⅲ期からＢ類がＡ類を上回るようになり、Ⅳ期では新たに内外面赤色漆塗りのＣ類が出現する。施文では印判施文は見られないようであり、器形ではⅣ期になると前期には見られなかった高台が高く、深い椀が出現し様相が異なってくる。

鎌倉でも市街地中心部での発掘調査の増加と同時に急激に出土量が増加し、研究が盛んになった。とはいえ多くの発掘調査団が個別に調査、研究している現状では鎌倉全体を見た研究はされていない。研究は一遺跡内での出土椀・皿の器形分類[15][16]や紋様研究[17][18]が主流であった。その後、多量の漆製品の椀・皿が出土した佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）の調査で中世漆製品の様相がより明らかになり、この結果、椀・皿の施文紋様の集成も行われ、他県より遅れたが最近になり編年試案も発表されている。[19]

佐助ヶ谷遺跡を中心とした椀・皿の編年試案では施文椀・皿をⅠ類、無文椀・皿をⅡ類に大別し、施文のⅠ類を手描き（Ａ）、印判（Ｂ）、内面朱塗り（Ｃ）に、無文のⅡ類を塗が良く器肉の薄いもの（Ａ）、塗が悪くがっしり作られたもの（Ｂ）とに分け、これらを年代別に８期に区分している。

第Ⅰ期は新・古に区分できる。新期は鎌倉初期、12世紀第４四半期の年代を持ち岩手県平泉遺跡群出土の漆器椀・皿と類似する器形を持つ。赤色漆による施文は、唯一鶴岡八幡宮研修道場用地４面７溝で稚拙なＡ類施文が１点確認されている。古期は新期と同様の器形であるが明確ではない。鶴岡八幡宮鎌倉国宝館用地[20]では赤色漆の施文は確認されていない。古期の年代は12世紀中頃が考えられている。

Ⅱ期は２層に分かれ、13世紀第２四半期～第３四半期頃の年代が考えられている。椀は総高台から角ばった輪高台へと変化し、皿は総高台、無高台に断面三角形の小さな輪高台

が少量混在する。文様は下層ではA類1点のみで、上層ではA類4点とB類2点が出土している。Ⅲ期はやはり2層に分かれ、13世紀後半の年代が考えられている。椀・皿共に断面三角形の輪高台になり、器肉も薄い。文様はB類が増加し、上層からはC類の椀が出現する。Ⅳ期は2層からなり、14世紀の前半の年代が考えられている。鎌倉では最も漆器椀・皿の出土量が多くなる。文様ではA、B類が複雑に組み合され変化が多く、Ⅲ期に出現したC類も増加する。Ⅴ期は椀・皿の減少期にあたり、年代は14世紀後半が考えられている。文様ではB、C類が極めて少なくなる。Ⅵ期、Ⅶ期は資料が少ない。器形は変化していないが、Ⅵ期には施文B類は全く見られない。Ⅵ期は15世紀前半頃、Ⅶ期は15世紀中頃の年代が考えられている。Ⅷ期は鎌倉市街地遺跡群ではなく小田原北条氏の城である玉縄城関連遺跡の出土椀・皿が相当する[21]。椀・皿の高台はしっかりした断面四角形から合鹿椀のような背の高いものに変化し、器肉も厚くなる。文様はすべてC類である。

鎌倉での形式編年の概要を見ると、赤色漆による施文は鎌倉成立期のⅠ期新にA類が1点あるが、Ⅰ期古の鎌倉国宝館用地では施文は確認できない。B類の印版施文はⅡ期の後半に確認でき、Ⅵ期には全く見られなくなる。C類はⅢ期後半に出現しⅧ期ではすべてがC類になる。器形ではⅠ期では総高台あるいは板高台であるがⅡ期から断面三角形の輪高台が多くなりこれがⅦ期までほとんど変化しない。しかし、Ⅷ期になると断面四角形の背の高い高台が主流となり前期までの背の低い輪高台は全く見られない。

Ⅲ．問題点の整理

たしかに最近の各遺跡の調査報告書では徐々に出土木製品が掲載され、樹種同定等の分析結果を見る事も多くなり、例えば形代や下駄等個別項目的な集成等も行なわれるようになっている。しかし、木製品の研究は決して全国的な集成が第一の目的ではない。集成はあくまでも研究の第一歩なのであり、各製品が生活の中でどのように使われたかあるいはその製品の地域的な様相や時代ごとの変化があったのかをつかむ事が目的と考えている。したがって、木製品を細かく取り上げることは当然のことであって、例えば当然出土するべき条件下で箸があることの意味、ないことの意味に注意を払うべきである。従来の珍品主義や優品主義では何事も解決しない。

脇道にそれるが木製品が国内で最も多く出土するであろう鎌倉では、恥ずかしながら保管あるいは保存処理施設がほとんど整っていない。このため調査中あるいは取り上げた後の保存・管理に多くの手間・経費を必要とする木製品・漆製品に対して珍品主義や優品主義がしばしば顔を出す。

たしかに現状では木製品は形状が摑めなければ木片であり、また形状が判明しても100

点の箸片より年代の摑みやすいかわらけ1個体を重要視する傾向がある。調査した遺跡や遺構について速やかな年代決定が求められる現状ではやむを得ない面もあろうが、木製品・漆製品の持つ役割を考える事によって研究の視点を変える必要がある。これは数百本出土しても箸は箸であり年代の摑めるかわらけ一片の代わりにはならないという従来の認識ではなく、そこに数百本の箸を使う食事や儀式があった事の意味を考えることである。話はまたそれるが私は箸や折敷を使う食事はごく当り前の庶民的な日常の食事風景とは考えていない。椀・皿も同様である。箸を観察すると粗い削りで先端が扁平なものが多く使用による摩滅がほとんど見られないことに気付く。この形状の箸では現在のような食事、例えば箸で軟らかい飯や惣菜をはさみ取ることは困難である。現在の感覚でいえばほとんど実用的ではない。

木製品も形態変化、法量変化を分析することにより、考古学的な年代決定資料とすることも可能である。例えば、鎌倉の佐助ヶ谷遺跡では７～８期（13世紀後半）で出土する折敷は一辺23㎝前後の方形であるのに対し、４期（14世紀中頃）の折敷は一辺16～18㎝まで小型化している。箸はこれほど明確ではないがやはり小型化している。これはまだ１地点で確認された変化に過ぎないが、この傾向が鎌倉市内の他地点遺跡や他県の遺跡でも確認出来れば、折敷や箸の法量での遺構・遺跡の年代推測も可能である。

漆製品では石川県西川島遺跡群、広島県草戸千軒町遺跡、神奈川県鎌倉市街地で発表されている椀・皿を中心とした編年研究に岩手県・平泉遺跡群の出土漆器椀・皿の様相を加えると全国規模でのおおよその器形・施文変化が把握される。全国規模でのおおよその変化は７項目に要約できる。

（器形変化）

1　平安末～中世初頭、鎌倉遺跡群の初期（12世紀末）までの椀・皿は板高台がほとんどを占める。

2　13世紀～14世紀代の漆器椀・皿の高台は低く、断面形が三角形ないしは方形を呈している。

3　15世紀頃から高台が高くしっかりとし、戦国時代頃には３ｃｍをこえる高さを持つものがほとんどを占める。

（施文変化）

4　平泉の12世紀段階の遺跡群から出土する漆器椀・皿には赤色漆による施文は、現段階では全く確認されていない。

5　鎌倉における施文椀の出現は、鶴岡八幡宮４面７溝（創建期頃）である。

6　印判施文は（鎌倉では）13世紀後半～14中頃にしか見られない。

7　13世紀後半～14初めに出現する内面赤色漆塗の椀・皿は、15世紀代に極めて多くな

り、戦国時代には大半を占める。

上記の椀・皿の年代的な変化は、全国の数地点の成果を要約しただけのものであるが、かなり斉一性の強い変化様相といえる。例えば東国や西国の各遺跡での中世土器（かわらけ）の様相が大きく異なっていることを思えばきわめて異常である。

漆器椀・皿に関しては以下の3点が当面の問題点として挙げられる。これ以外の年代観に関する2～3の問題、例えば鎌倉出土の14世紀のものに極似する印判施文椀が8世紀後半と比定される福井県金津町桑原遺跡の例[22]に代表されるような、漆器研究が開始された頃の伴出遺物の少ない中世遺物に対する時代判定の誤りに起因しているものは個別に再検討することで比較的簡単に解決できる。

1　漆器椀・皿の性格。

2　椀・皿の施文技法と開始時期。

3　地域色の強い土器に対する斉一性の強い漆器碗・皿の性格、意味。

まず基本的な問題点として漆器椀・皿はどのような性格（用途）の食器であるのかという点がある。この点は過去に木地椀の存在、土器碗との性格差等の問題も含めて、活発に議論されていない。現状では土器碗の減少と漆器椀・皿の出現・増加が密接に関係し、漆器椀・皿と木地椀・皿が土器に代わる「食器」と考えられている。したがって遺跡から漆器椀・皿器形が出土することが少ないのはもともと存在しないのではなく、地中環境により消滅してしまっている[23]。このようにあくまでも椀・皿を使用する食事が各階層・地域に普遍的に存在したことを前提に考えるあまり、それを実際には出土することの少ない漆器椀・皿や木地椀・皿に求めるという考え方がどうも支配的なようだ。しかし、現実にこれらの椀・皿が多く出土しているのは都市的な空間あるいは都市と密接な関係を持つ地方拠点周辺であり、所謂村落部での状況ではない。

絵巻物等に描かれている食事風景を見るまでもなく、これらの椀・皿（木製品椀・皿も含め）が食器であることは間違いのないところであるが、はたしてこれらは都市・農村を含めたあらゆる人々が日々使う「日常食器」なのか都市部を中心とする「非日常（儀式）食器」であるのかの判断が明確にくだされていない。特に漆器椀・皿を純粋に考古学的な側面から日常食器であることを実証するには、少なくとも椀・皿器形で最も出土点数が多くあらゆる（漆器の残る条件を備えた）遺跡で出土し、使用痕跡（漆剝落やカスレ）が明確に内底面あるいは口唇部に残ることが必要であろう。ここで言う日常食器とはもちろん少なくとも庶民といわれる一般の人々も使う器で、日に2～3回（最低でも1回）使用する器を指す。しかし、これらの条件を満たした漆器椀・皿が多量に出土することはまれであり、使用痕跡のほとんど残らない赤色漆で絵の描かれている椀・皿のほとんどは儀式食器であろうという説も出てくる[24]。

第2の椀・皿の施文に関わる問題はその施文開始時期、印判施文の成立と時期、内面（あるいは外面も含む全体）赤色漆施文の成立の時期とに大きく分けることができる。赤色漆による施文は『病草子』の「歯のみなゆらぐ男の図」に描かれる施文椀からは平安時代末には存在していたことになろうが、文化が非常に爛熟していた平泉遺跡群で施文漆器椀・皿が全く出土しないこと、鎌倉での稚拙な施文椀の初現が12世紀第4四半期末期であることと矛盾する。おそらく椀・皿の施文の成立は、鎌倉時代に入ってからで施文が一般化するのが13世紀の中頃以降であろう。

印判施文は非常に短命な特殊技術である。印判施文椀・皿の、下地漆の科学的な分析結果等もふまえ、この技法を中世漆器椀・皿の量産技法と考える説もあり[25]、支持する研究者は多い。これとは逆に印判紋様と同時代の螺鈿あるいは蒔絵紋様とが類似していること、印判施文椀・皿は決して量的に多く出土していないこと等から、この技法は「螺鈿風文様」を貝等を使わず安価に製作するためのものとみる説もある[26]。確かに中世に入って前代（平安時代）には階級による使用制限のあった漆椀・皿が武士社会にも使われるようになったが、これが一気に庶民層にまで普及したとはとうてい考えられない。「量産」を単に多く生産するという意味にとれば簡素な手描きも前代に比べれば量産技法である。これは決して揚げ足を取っているわけではなく、例え量産品でも中世においては庶民までが手軽に使える器ではなかったと考えているのである。

考古学とは全く異なる美術史側から文様を見た場合、文様が稚拙でありとうてい専門の（施文）職人集団が作ったとは思えない製品が多くあるとの指摘がなされている[27]。発掘調査結果からは断定的に言えないが、私は印判施文技法の成立と発展さらには製品の流通は都市鎌倉と極めて深い関係があると考えている。さらにいえば生産を行っていた集団は鎌倉内か鎌倉の中心と極めて関係の深い地域に居住していたと考えることができる。そのため、鎌倉幕府滅亡と前後して技法自体（生産集団）も消滅したのであろう。当然のようにその集団の根本は京都の平安時代文化や金色堂を持っていた平泉文化であり、両都市の職人集団であっただろう。

Ⅳ．今後の課題

今後の木製品・漆製品の研究は従来の考古学的な編年研究を中心的に行なうことはもちろんであるが、これに限らず、民具学、文献史学、民俗学、文様学、美術史あるいは科学的な諸分野の分析等からのアプローチも必要である。これらの学問・研究とどのように共同歩調を取るか、木製品・漆製品をどのような形で考古学的な遺物として取り込んでいくかという事が今後の課題であり、問題点でもあろう。課題としてはおおよそ3点が挙げら

れる。

1　関係諸学との研究方法のあり方。

2　考古学の遺物としての木製品・漆製品の位置付けや意味の認識。

3　考古学側が年代決定あるいは存在、使用方法の証明手段として使う事の多い絵巻物等との間に見られるいくつかの問題の扱い。

第1にあげた関係諸学との研究方法を主導的に実践したのは、中世ではないが、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が1994年に主催した設立10周年記念シンポジュウム「古代における農具の変遷―稲作技術史を農具から見る―」であろう[28]。このシンポジュウムでは、農具という現在までの系譜が比較的つながっている分野ではあるが、民具学の研究成果も取り入れ、総合的に木製品を研究対象としている。また科学的手法を有効に使用した例としては岩手県平泉町の柳ノ御所跡遺跡の井戸内一括資料の年代決定がある[29]。この例では出土した折敷片を「年輪年代測定」で分析し、用材の伐採年代が1177年である事が判明している。この結果は、土器編年に大きな成果を与えている。また漆製品の分析では木製品と同様に木地の樹種同定はもちろんであるが、塗膜分析を行なう事によって製品の作成過程そのものを科学的に見、製品の質を論ずる資料を蓄積している。いずれの学問を取入れる場合にも木製品・漆製品を単に考古学遺物という一方向から見るのではなく、現存する製品との対比や客観的な分析データを生かせるような考古学側の資料作成が必要である。

最近の民具研究の方法は従来の写真掲載に替り、考古学にもなじみ深い実測図を載せている例が多く違和感はなくなっているが[30]、様々な部品が組み上がった製品のままで出土する事のない、例えば機織り機の部品等はやはり考古サイドでは同定が困難であり、民具学研究者との共同研究が必要になろう。こうした総合的な木製品、漆製品の研究を行なうことが出来る環境を作ることが大きな課題である。

第2の考古学の遺物の中での木製品・漆製品の位置付けや意味を考えるということは、けっして陶磁器の編年研究を中心とした従来の研究方法を改めるという事ではない。当然出土遺物の形式編年は必要なのであるから、遺物の形式編年といういわば縦方向のラインを陶磁器を中心に作り、これを相互に補足し合うと同時に、木製品・漆製品は生活復元という横方向のラインに重点を置く必要がある。これは「器」という生活のごく一部分しか占めない陶磁器では到底及ばない部分であり、これから最も必要とされる研究分野である。生活復元であるからこそ多量に出土する遺物あるいは少量しか出土しない遺物の数量や法量も重要な意味を持つ。これは陶磁器も同様である。また、中世土器（かわらけ）と漆器椀・皿を考えた場合、地域的な器形変化を持つ土器に対し、各地域で斉一的な器形変化、施文技術変化を持つ漆器椀・皿をどのように位置づけるかも大きな問題であろう。仮に漆器椀・皿が全国一元的に器形変化をしているとすれば、各地の土器編年を結び付ける明確

な遺物が増えることになる。

第3の絵画資料との間に認められるある種の矛盾は、実は最も単純で問題として取り上げる必要もないのかもしれない。単に私個人のこだわりとしての問題提起である。これは遺物で多い。先に示した「歯のみなゆらぐ男の図」内の椀・皿と出土遺物との年代的なズレのみならず、食事状況あるいは生活様式に多く認められる。絵画に描かれた食事の情景・様相が当時のごく一般的なものであったのならば、当然描かれたのと同じ製品が各地の中世遺跡で出土するはずである。仮に富裕層の食事でのみ見られた状況が描かれたのだとしても、やはり平泉や鎌倉といった当時の中心的な都市では使用されていた可能性は高く、当然地中条件が合えば出土しているはずである。しかし、現在までの鎌倉の発掘調査に限っても、絵画資料を裏付けるような時代での施文椀や内面赤色漆塗りの椀・皿、一般民家での足付まな板、包丁などの出土例は極めて少ない。希に鎌倉以外の中世遺跡で報告されている事はあってもそれは考古学的な年代決定ではなく、絵画資料を時代認定の拠り所としている事が多い。

発掘調査で出土しないことは必ずしも「無い」ことを実証しているのではないので今後出土する可能性は十分にある。したがって現在の結果にこだわる必要はないのかもしれないが、釈然としない。絵画資料に描かれていることがその絵画の成立年代の生活状況を正確に描いているのだろうか、はたまた絵画の解釈が間違っているのだろうかという疑問が残る。例えば『一遍上人絵伝』の京都・因幡堂の場面で床下に寝転ぶ乞食が持っている内面朱・外面施文椀でも「乞食まで買って持つほど安価で流通している」、「完全な形で捨てるのでそれを拾って持っている」、「後の時代の器が描かれている」、「その時代の器が正確に描かれている（が発掘では確認できない」）等々に解釈できる。又、持っている用途としても「食事の椀を持ち歩いている」、「托鉢等の為に軽い器を持ち歩いている」と見ることができるが、正解が解らない。

絵画資料のある場面を「年代あるいは用途等の指標的な絵画資料」として私も含めた多くの考古学側の研究者が使用している。これはある意味では幾つかある解釈のほんの一部分しか見ていないことにもなる。今後は絵画資料も一つの遺物として慎重に使うべきではないだろうか。

結果として中世の木製品、漆製品の研究は決して順調に進展しているとは言い難い。木製品では出土木片を用途の摑める製品に同定することすら十分に出来ていない。鎌倉の佐助ヶ谷遺跡では同定できない用途不明品のほうが多いのである。まずこの状況を関係する諸学問の助力を得て解決することが必要であろう。生活復元を十分なものにするには出土製品の樹種同定や塗膜分析、年輪年代測定等を積極的に行うことも重要である。漆製品では、1995年12月に北陸中世土器研究会が開催を予定している研究会のテーマは「中世遺跡

出土の木製容器」であり、1996年春には古代を対象にした木製容器の研究会も予定されているようだ。このように木製品に対する研究や環境は確実に好転しているが、陶磁器に比べるとまだまだ低調である。

個人的には鎌倉の佐助ヶ谷遺跡の出土遺物個体数で陶磁器類がかわらけを含めて30,000個体前後であるのに対して、より生活復元情報を多く含んでいる木製品の箸が約50,000個体、それ以外の木製品が数万点、さらに金属製品や石製品、骨製品などが20,000点を越えている状況にもっと目を向ける必要があろうと考えている。

「漆器椀・皿は日常の食器ではない」という自説を事あるごとに発表しているが、これは遺物に残された痕跡や計測した個体数から出てくる結果である。疑念をいだかれてはいるが、私は決して食器であることを否定している訳ではない。あくまでも通説的にいわれている「普段使いの食器」「毎回の食事で庶民層も使う食器」としての日常性に個体数や痕跡から疑問を持っているのである。はたして中世に碗・皿・箸・折敷を使う食事形態が儀礼的な食事以外に普遍的にあったのだろうかということである。これを確認する私個人の方法としてすべての食器（碗・皿）の日常性を一回否定し、その後に痕跡や個体数等で日常の食器を探す方法をとっている。

日常生活において多く使ったもの、例えば鎌倉における常滑窯の甕やこね鉢あるいはかわらけ等はよほど特殊な事情が無い限り多く出土し、限定的に少量しか使用しないものはやはり少量しか出土しない。したがって、鎌倉の各地点で少量づつ破片が出土する伊勢系土鍋のような鍋は少量の個体数であることを考慮すれば普遍的な「日常の炊事に使う鍋」とはいえない。さらに完形品で出土することが多い器（かわらけや漆器椀や皿等）は完形品でも捨ててしまう使い方をされているので、そこには何らかの意識がある。このように幾つか数量等にこだわって考えている。そのためあえて出土個体数や法量、痕跡あるいは出土状況等にも注意しているのである。

本文を執筆後、石川県の四柳氏に1995年12月の京都での第14回中世土器研究会の折りに鎌倉出土の漆器椀・皿は漆の質・塗りが良いため２～３年の使用では内底面等に痕跡が付かないかもしれないとの指摘を受けた。とすれば痕跡が付いていないことをさほど問題にしなくても良いのかもしれない。しかし、例え２～３年の使用では痕跡が残らないとしても椀・皿の内底面等に使用痕が付かないうちに多くは完形品で捨てられてしまう事実がある。完全な形のままで捨てられるには何か特殊な意味があるはずであり、やはり施文椀・皿が儀式食器であろうとの考えに変わりはない。

（鎌倉考古学研究所）

註

1）実際はほとんど出土していないが「木椀（漆椀）」であったという発表はよく耳にする。

2）奈良国立文化財研究所『木器集成図録―近畿古代編―』1985

3）東京都葛飾区の葛西城跡の発掘調査。1972～1983年にかけて調査されている。『葛西城』葛西城址調査会　1983　他

4）御存じの方も多いが、広島県福山市に存在する中世遺跡である。1975年にから現在まで調査および出土品整理作業が継続して行なわれている。

5）福井県に存在する中世後期の遺跡。1968年から現在にいたるまで発掘調査作業が行なわれている。

6）鎌倉市内の旧鎌倉といわれる、山に囲まれた内側の低地遺跡。1978年頃から発掘調査が始まっている。

7）奈良国立文化財研究所『木器集成図録―近畿原始編―』1993

8）第3回企画展図録『一乗谷のくらしと木』福井県立朝倉氏遺跡資料館　1989

9）大三輪達彦・斉木秀雄他『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴岡八幡宮　1983

10）大三輪達彦・斉木秀雄他『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団　1993

11）草戸千軒町遺跡調査研究所『第5回中世遺跡研究集会資料集　中世遺跡出土の漆器』第5回中世遺跡研究集会実行委員会　1985

12）四柳嘉章「II　中・近世漆器の編年」『西川島―能登における中世村落の発掘調査―』石川県・穴水町教育委員会　1982

13）四柳嘉章「掘り出された縄文～中世の漆器―北陸出土例を中心に―」解説資料　日本漆文化会議・併催企画展　日本漆文化会議　1995

14）下津間康夫「草戸千軒町跡出土漆器類観察ノート―椀・皿類の編年試案―」『草戸千軒』No.216　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1991

15）斉木秀雄「IX　漆製品」『研修道場用地発掘調査報告書』鶴岡八幡宮他　1983

16）宍戸信悟「中世鎌倉出土の漆塗木製椀・皿の分類と変遷」『神奈川考古同人会10周年記念論集』神奈川考古同人会　1986

17）岡山　仁「千葉地遺跡出土の漆器文様について」『鎌倉考古』No.15　鎌倉考古学研究所　1982

18）伊丹まどか「椀、皿における漆絵の文様集成」『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』第2分冊　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団　1993

19）a　斉木秀雄「鎌倉における出土遺物の個体数調査―鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の出土飲食器を中心として―」『考古論叢神奈河』第3号　神奈川県考古学会　1994

b　斉木秀雄「漆器と陶磁器―鎌倉・佐助ヶ谷遺跡を中心に―」『貿易陶磁研究』No.15　日本貿易陶磁研究会　1995

20）松尾宣方他『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書―鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査』鎌倉市教育委員会　1985

21）鎌倉市植木での発掘調査で出土している。未報告。椀・皿の図は註18ａ，ｂの編年図で使用している。

22）『桑原遺跡』金津町教育委員会　1977

23）四柳氏は第14回中世土器研究会の折、出土しないといわれる漆製品も実際に土を洗うと多くの塗膜片があるとのコメントをされている。

24）註18ｂと同じ。

25）四柳嘉章「佐助ヶ谷遺跡出土漆器の塗膜分析―第１次報告―」『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』第２分冊　佐助ヶ谷遺跡発掘調査団　1993

26）註18ｂと同じ。

27）第４回鎌倉市遺跡調査研究発表会（1995年）で鎌倉国宝館の岩橋春樹氏が口頭発表されている。

28）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念シンポジウム『古代における農具の変遷―稲作技術を農具から見る―』発表要旨集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994

29）『柳之御所跡発掘調査報告書―平泉バイパス・一関遊水池関連遺跡発掘調査―』平泉町教育委員会　1994

30）例えば、名久井芳枝『若者たちと民具―モノは彼らに何を語ったか―』一芦舎　1991　等